

主要果樹の生産動向等について

平成16年11月11日
農林水産省生産局

目 次

1 果樹の生産動向	
(1) 栽培面積、生産量の動向 -----	1
(2) 単収の動向 -----	2
2 主要果樹の生産動向	
(1) 果樹計 -----	3
(2) うんしゅうみかん -----	4
(3) その他のかんきつ -----	6
(4) りんご -----	8
(5) ぶどう -----	10
(6) 日本なし -----	11
(7) 西洋なし -----	12
(8) もも -----	13
(9) おうとう(さくらんぼ) -----	14
(10) びわ -----	15
(11) かき -----	16
(12) くり -----	17
(13) うめ -----	18
(14) すもも -----	19
(15) キウイフルーツ -----	20
(16) パインアップル -----	21
3 果樹における生産技術対策の今後の方向 -----	22

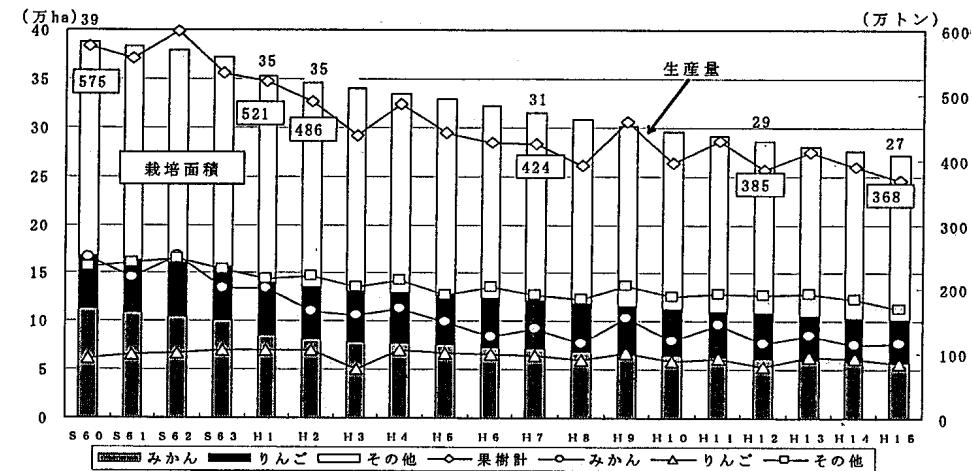
1 果樹の生産動向

(1) 栽培面積、生産量の動向

① 果樹の栽培面積は、担い手の減少、高齢化や果実製品等の輸入の増加の影響から、昭和49年の44万haをピークにその後一貫して減少を続けており、平成15年には27万haとなっている。

また、生産量についても、年次間の変動はあるものの総じて減少傾向にあり、平成元年まで500万トンを超えていたが、近年は400万トン前後で推移している。

○ 栽培面積、生産量の推移



資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「食料需給表」、「果樹生産出荷統計」

② 品目別に見ると、うんしゅうみかんが最も生産量が多く、次いでりんご、日本なしと続き、生産量上位6品目で全体の約8割を占めている。

なお、うんしゅうみかん以外の品目も含めたかんきつ類（右表の※を付したもの）全体では、果樹全体の約4割を占めている。

③ また、品目別の生産量の増減を見ると、

- ・ うんしゅうみかんやなつみかん、はっさくは近年一貫して減少
- ・ りんごは近年ほぼ横ばい
- ・ 日本なし、かき、ぶどう、ももは減少割合は小さくなっているものの、引き続き減少
- ・ いよかん、うめは増加傾向にあったが最近は減少と、総じて減少又は横ばいで推移しているが、近年、不知火、西洋なし、おうとう（さくらんぼ）等は増加傾向にある。

○ 主要果樹の生産量の推移

果樹	計	S 60	H 2	H 7	H 12	H 13	H 14	H 15
うんしゅうみかん（※）	5,747	2,491	1,653	1,378	1,143	1,282	1,131	1,146
りんご	910	910	1,053	963	800	931	926	842
日本なし	461	461	432	383	393	368	376	332
かき	290	290	286	254	279	282	269	265
ぶどう	311	311	276	250	238	225	232	221
もも	205	205	190	163	175	176	175	157
いよかん（※）	170	170	217	173	188	178	139	120
うめ	80	80	97	121	121	124	113	88
なつみかん（※）	269	269	170	110	85	86	82	75
はっさく（※）	209	209	123	74	67	68	62	62
キウイフルーツ	69	49	44	42	40	37
ぽんかん（※）	24	24	29	32	...	40	36	...
西洋なし	9	9	11	18	31	28	31	34
くり	48	48	40	34	27	29	30	25
不知火（※）	0	8	...	31	29	...
すもも	36	36	32	32	27	29	29	23
おうとう（さくらんぼ）	23	23	16	16	17	20	21	19
清見（※）	4	4	8	16	...	24	18	...
いちじく	12	12	16	15	...	18	17	...
ゆず（※）	9	9	10	14	...	18	17	...
ネーブルオレンジ（※）	63	63	50	26	19	18	16	15
ハインズアップル	41	41	32	26	11	11	13	11
ぶんたん（※）	7	7	8	9	...	12	12	...
びわ	10	10	13	12	8	10	10	9

資料：農林水産省「食料需給表」、「果樹生産出荷統計」、「特産果樹生産動態等調査」

注：15年生産量の上位順に並べた。また、下線の果樹は近年増加傾向の品目。

(2) 単収の動向

- 果樹の単収については、高品質化に生産の重点が置かれてきたため、多くの品目で、年次間変動を伴いつつ、横ばいかやや増加傾向で推移している。

かんきつ類は隔年結果性を有することから、年次間変動が大きく現れているが、うんしゅうみかんについては、平成13年度から実施している需給調整対策等により、変動幅は抑制されつつある。

○ 単収の推移

(単位 : kg/10a)

品 目	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15
うんしゅうみかん	2,110	1,820	2,510	1,970	2,420	1,960	2,280	2,060	2,140
い よ か ん	1,670	1,960	2,050	2,200	1,990	2,120	2,140	1,740	1,570
な つ み か ん	1,930	1,840	2,180	2,120	1,960	1,950	2,110	2,050	1,970
は っ さ く	1,690	1,840	2,010	1,840	2,030	1,990	2,180	2,100	2,150
ネーブルオレンジ	1,140	1,220	1,250	1,210	1,370	1,310	1,360	1,300	1,230
り ん ご	2,020	1,900	2,130	1,930	2,080	1,820	2,160	2,180	2,020
日 本 な し	2,140	2,140	2,330	2,230	2,310	2,350	2,240	2,330	2,110
西 洋 な し	1,450	1,410	1,600	1,750	1,560	1,870	1,660	1,800	1,950
か き	985	944	1,190	1,040	1,150	1,130	1,150	1,100	1,090
び わ	526	451	454	403	492	371	460	493	457
も も	1,470	1,550	1,630	1,570	1,460	1,640	1,660	1,650	1,490
す も も	864	722	913	876	703	826	921	914	709
おうとう(さくらんぼ)	489	390	541	536	448	446	501	536	482
う め	705	594	782	551	688	697	712	628	485
ぶ ど う	1,110	1,110	1,170	1,110	1,180	1,180	1,130	1,180	1,140
く り	114	103	116	95	112	101	112	117	98
キウイフルーツ	1,210	1,180	1,120	1,130	1,320	1,500	1,470	1,440	1,390
ハ・インアッフル	2,950	2,740	2,510	2,470	2,490	2,290	2,520	2,780	2,420

資料:農林水産省「果樹生産出荷統計」

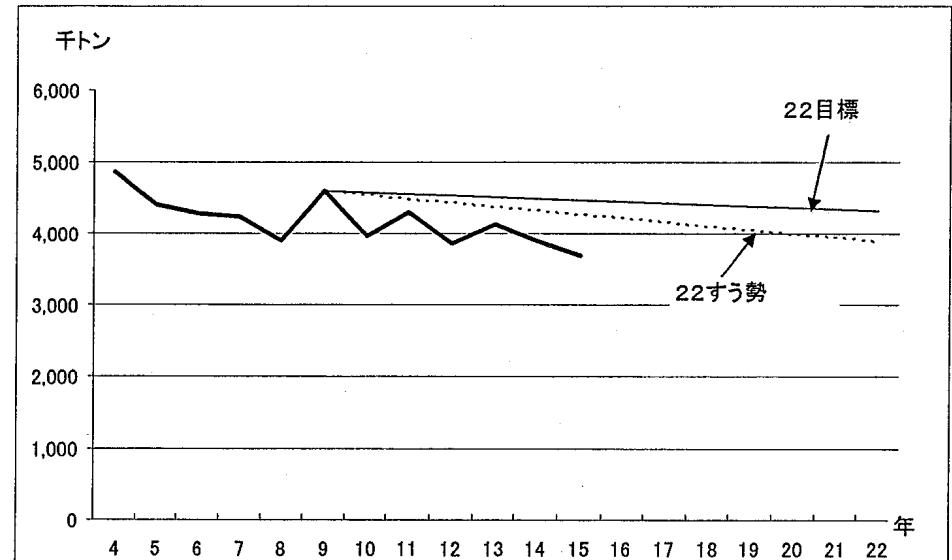
2 主要果樹の生産動向

(1) 果樹計

国産果樹の生産については、高齢化の進展、後継者不足等に加え、品目によっては需要の減退や価格の低下が大きく、生産意欲が減退していることから、近年、栽培面積が減少し、これに伴い全体としては生産量が減少傾向で推移している。

この結果、国産果樹の生産量については、22年度目標を下回って推移している。

○ 国産果樹生産量の推移及び22年度目標



資料：農林水産省「食料需給表」

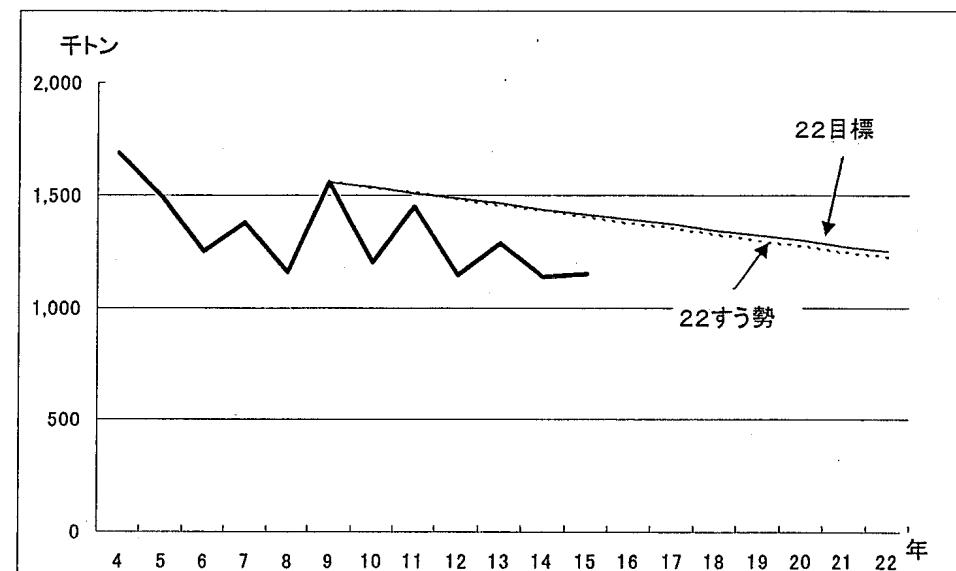
注：平成15年度は概算値である。

(2) うんしゅうみかん

① 近年の消費の減少を踏まえ、需給の不均衡を解消するため、13年産から需給調整・経営安定対策を実施しており、需給に見合った計画的な生産出荷を推進していることから、22年度目標を下回って推移している。

この対策を受け、隔年結果性が是正され、単収は表年はわずかに減少傾向、裏年はわずかに増加傾向にある。また、栽培面積は減少傾向にある。

○ うんしゅうみかんの国内生産量の推移



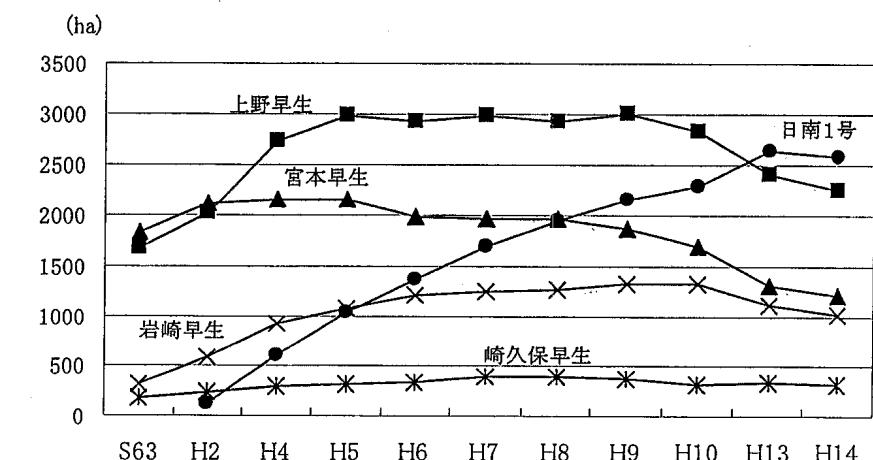
資料：農林水産省「食料需給表」及び果樹花き課調べ。

② 極早生、早生みかんが生産の半分を占めており、特に、極早生みかんの栽培面積シェアが増加している。

③ 極早生みかんについては、全果協が、12年から極早生みかん対策により、不良系統を削減することで、生産量を抑制するとともに、優良品種へ転換させている。

この結果、「宮本早生」等の不良品種が減少し、優良品種への転換、更に「豊福早生」、「かごしま早生」等各県が独自の品種を開発し、品種転換が加速されている。

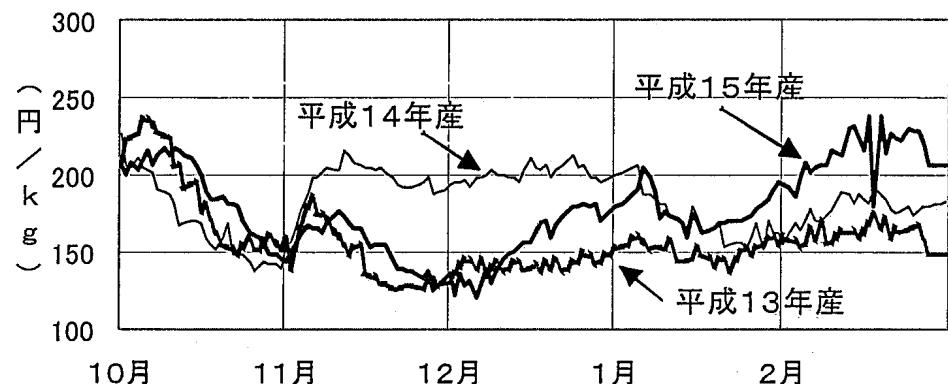
○ 品種構成の動向（極早生みかん）



資料：農林水産省「特産果樹生産動態等調査」（以下同様）

④ 早生についても、11月から12月にかけて過剰感があり、
価格低下していることから今後、他品目、優良品種への転換が
必要である。

○ うんしゅうみかん（露地）の卸売価格の推移（京浜市場）



資料：日本園芸農業協同組合連合会

○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
豊福早生	平成7年3月	熟期は9月下旬～10月上旬の極早生種、甘味は中、酸度は低い。	熊本県	137	444
肥のあけぼの	平成7年3月	熟期は10月中旬の極早生種、果汁及び甘味は多い。	熊本県	91	354
かごしま早生	平成13年7月	熟期は10月上旬の極早生種、甘味は中で酸は低い。	鹿児島県	-	65
ゆら早生	平成7年9月	熟期は10月中旬の極早生の高糖度系品種。	和歌山県他	4	49
石地	平成12年11月	熟期は12月上旬の普通種、高糖でコクがある。	広島県 佐賀県他	-	144

(3) その他のかんきつ（うんしゅうみかん以外のかんきつ）

- ① その他のかんきつ全体としては、栽培面積は減少傾向にある。
また、生産量は減少傾向にあり、22年度目標を大きく下回って推移している。

なお、15年度においては、いよかんについて、生産量の全国シェアが80%である愛媛県において、幼果期の台風による傷果、高温・多照により結果数が少なく、著しく生産量が減少した。

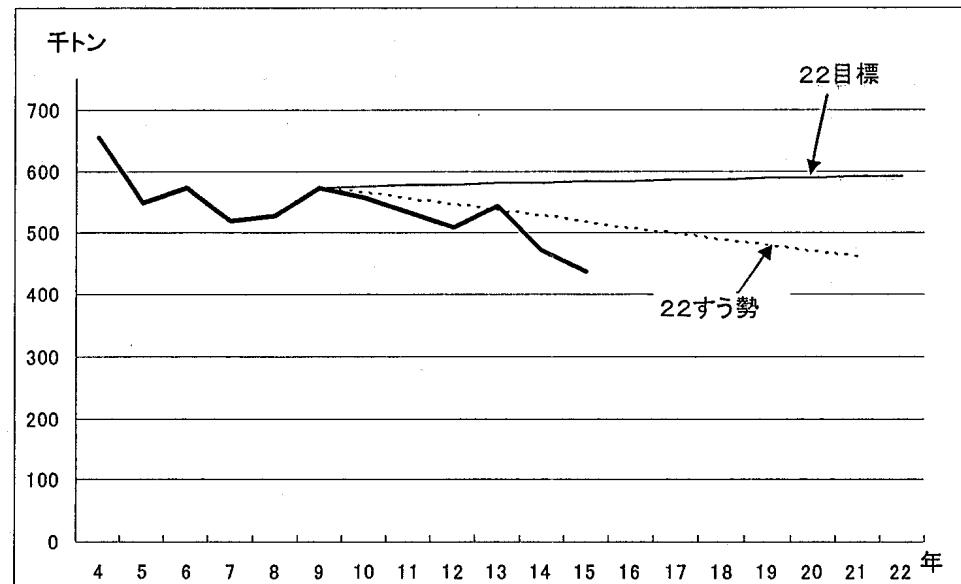
- ② いよかん、はっさく、ネーブルオレンジ、なつみかんの四晩かんについては、栽培面積は大幅に減少傾向、単収は減少傾向もしくは横ばいで、主産県の果樹農業振興計画でも生産量を大きく削減し、他の晩かんへ転換する目標となっている。

○ 中晩かん主産県における果樹農業振興計画（12年度策定）

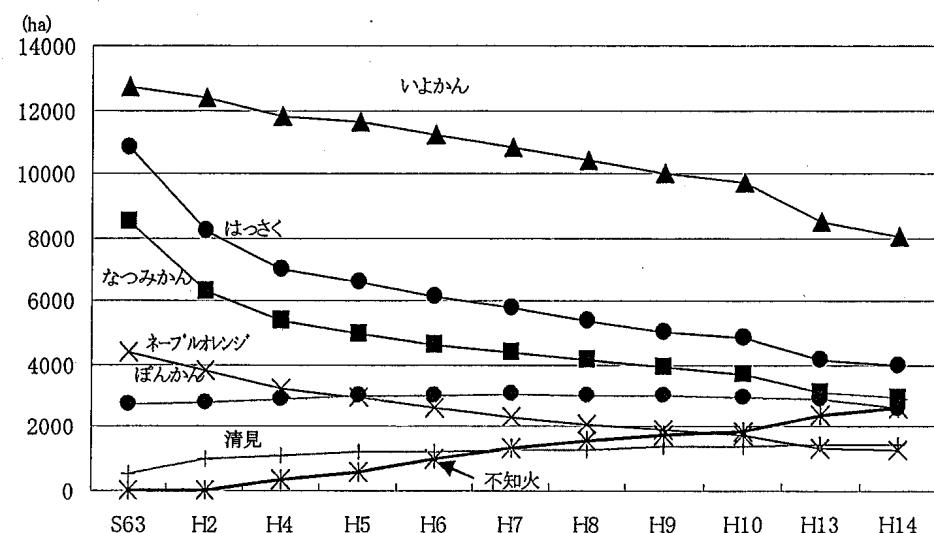
品目	主産県(生産シェア)	22年生産量目標の現状対比
いよかん	愛媛県(82%)	▲37%
なつみかん	熊本県(22%)	▲23%
	愛媛県(18%)	▲14%
はっさく	和歌山県(57%)	▲25%
	広島県(13%)	▲28%

- ③ 一方、清見、不知火等高糖系中晩かんの栽培面積は、四晩かんのほどの栽培面積にはなっていないものの急増しており、新しい品種として「はるみ」、「せとか」等、良食味なものや皮のむきやすい品種が育成され、栽培面積が増加している。

○ その他のかんきつの国内生産量の推移



○ 品種構成の動向

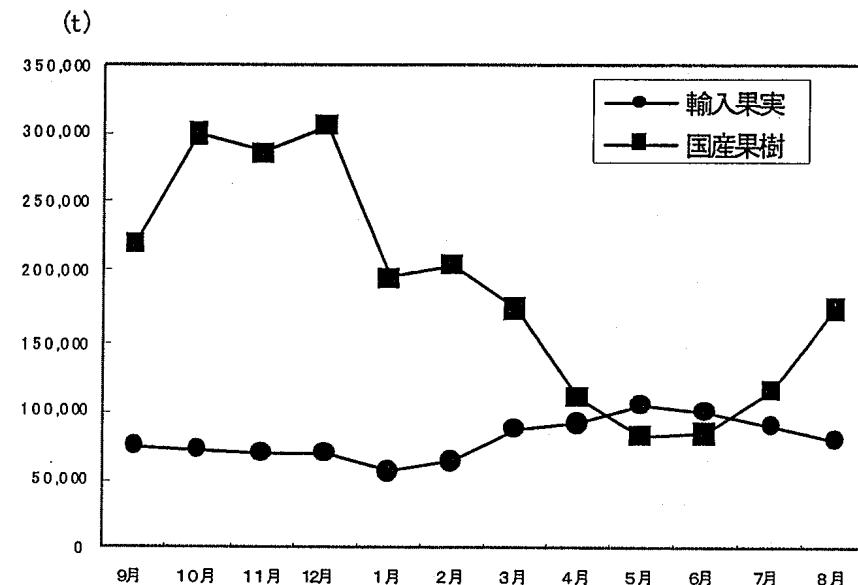


- ④ 4月～6月は国産果樹の供給量が少なく、国産果樹の端境期に生産できる高品質の晩かん類へ転換するとともに、更なる品種開発が必要である。

○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
はるみ	平成11年11月	熟期は1月、剥皮は容易、じょうのう膜は薄く、甘味が強い。	広島県、愛媛県、静岡県他	-	156
天草	平成7年8月	熟期は12月下旬～1月下旬、剥皮はやや困難、じょうのう膜の堅さ及び甘味は中。	愛媛県、香川県他	3	51
せとか	平成13年10月	熟期は2月上～下旬、剥皮は比較的容易で、じょうのう膜は極めて薄い。果実は甘く濃厚。	愛媛県、長崎県他	-	25

○ 主要果実の1・2類都市市場の入荷量（14年）



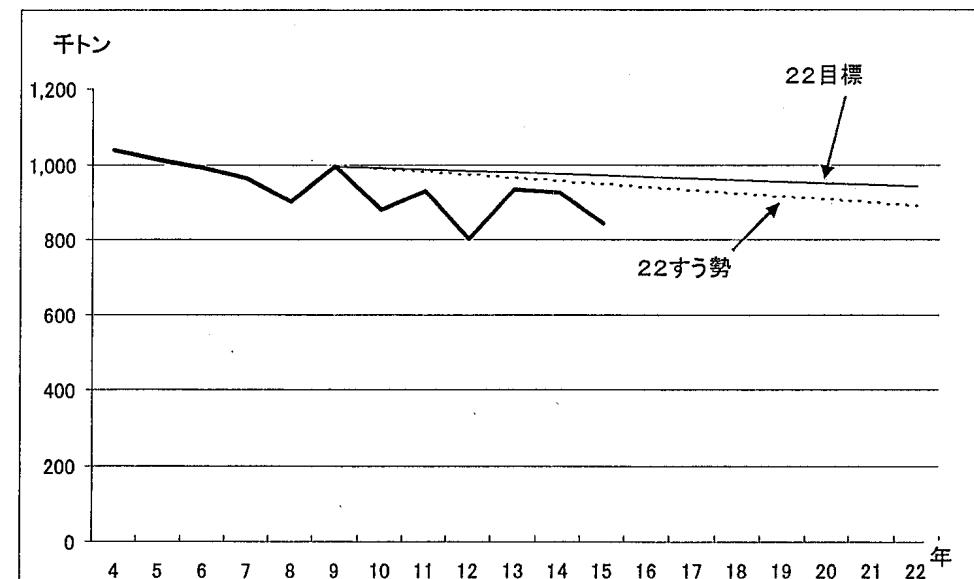
資料：農林水産省「青果物流通統計月報」

(4) りんご

① 単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあり、生産量は減少傾向で、気象災害により減収した年を除けば22年度目標をわずかに下回って推移している。

12年産においては春、夏の降ひょうにより、15年産においては低温日照不足による肥大抑制、台風による落果により、著しく生産量が減少した。

○ りんごの国内生産量の推移

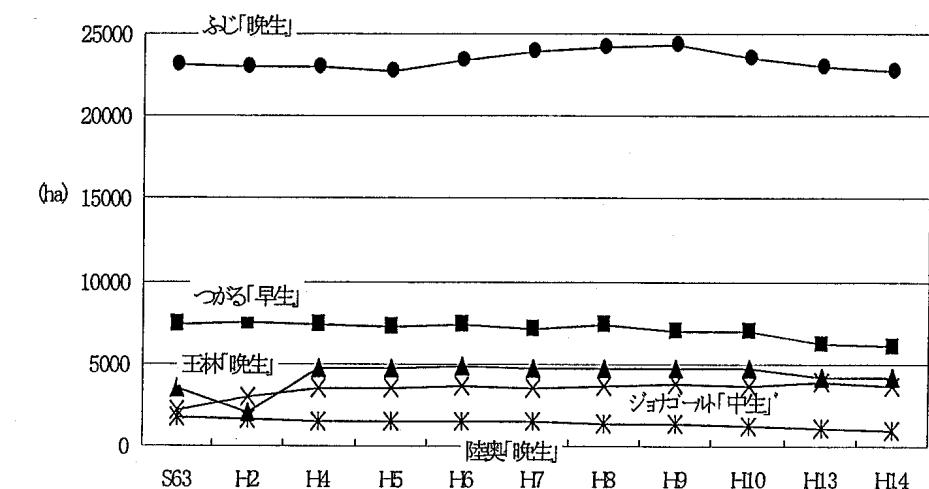


② りんごについては、品種転換による品質向上と新規の需要拡大で、これまで需要低迷に対応してきた。

昭和40年代までは「国光」、「紅玉」の2大品種が安定して生産されていたが、価格の大暴落以降、昭和50年代中頃まで、デリシャス系が生産の主力となっていた。

その後、生産過剰、消費の低迷などの影響により、生産量が減少し、「ふじ」等へと品種転換が行われた。

○ 品種構成の動向



③ 現在、「ふじ」が栽培面積の過半を占め、「ふじ」偏重傾向となつており、更に、出荷時期の早期化を図るために、「弘前ふじ」や「昂林」等着色系品種も生産されている。

④ 一方、青森県の「ふじ」の無袋化が進展し（7年：42%→16年：50%）、出荷の前進化が懸念されており、年内出荷の産地を中心に、生産量の少ない中生の優良品種が開発され、品種の切り替えが進んでいる。

特に、長野県においては、「シナノスイート」、「秋映」、「シナノゴールド」が育成され、今後の生産拡大が進められている。

⑤ 更に、多果汁で香りのよい「あおり9（彩香）」（青森県）、大玉で蜜入りの多い「涼香の季節」（山形県）等の高品質品種が開発され、更なる品種転換が進められている。

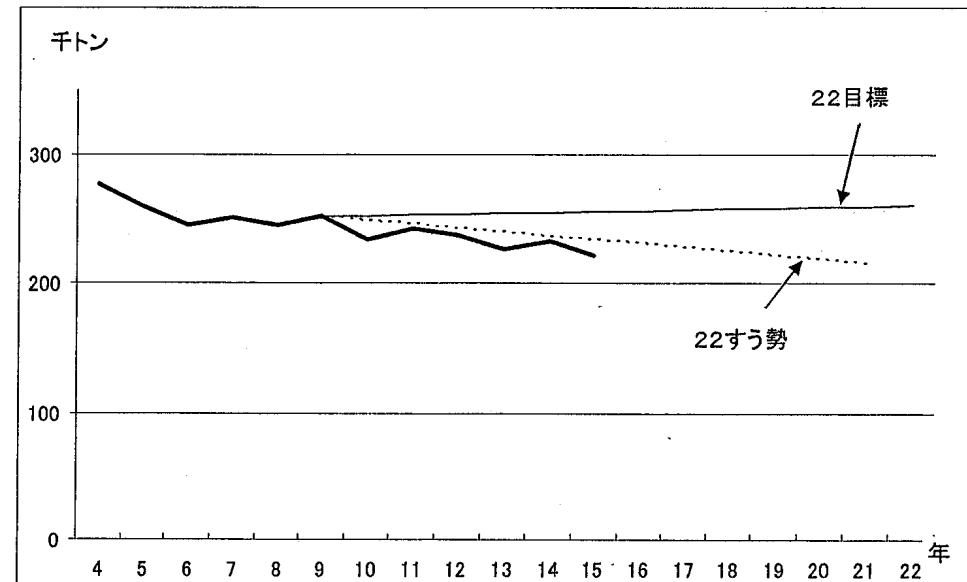
○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
シナノスイート	平成8年8月	熟期は9月下旬～10月上旬の中生種、多汁で肉質良い。	長野県 青森県他	-	140
シナノゴールド	平成11年8月	熟期は10月上旬～中旬の中生の黄色種。甘味酸味中、日持ちは良。	長野県 福島県他	-	93
秋映	平成5年3月	熟期は9月上旬の早生種、硬度は硬、甘味、酸味は中。	長野県他	15	71
きおう	平成6年3月	熟期は9月上旬の早生の黄色種、甘酸適和、日持ちは良。	岩手県他	27	125
昂林	-	熟期は9月下旬～10月上旬の中生種の着色系ふじ。甘酸適和で食味は良好。	山形県 青森県他	33	192

(5) ぶどう

- ① 単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあるため、生産量は減少傾向で、22年度目標を下回って推移している。
- ② かつての主力品種であった小・中粒系品種の「デラウェア」や「キャンベルアーリー」は、消費者の大粒系嗜好への変化に伴い、急激に栽培面積が減少し、「巨峰」や「ピオーネ」等の大粒系品種が増加している。
- ③ 赤色品種の「安芸クイーン」をはじめ、「藤稔」等の大粒系品種が開発され、生産拡大が図られており、各県でも大粒系品種を中心に品種転換が進められている。

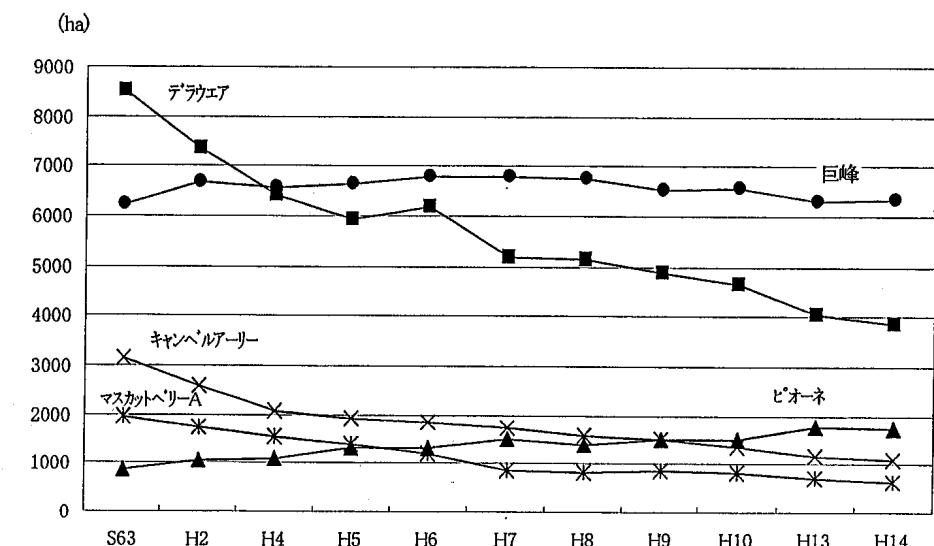
○ ぶどうの国内生産量の推移



○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
藤稔	昭和60年7月	熟期は8月中下旬、黒色系大粒系ぶどう。食味良好。	山梨県 岡山県他	99	205
安芸クイーン	平成5年3月	熟期は8月下旬、赤色ぶどう、大粒で糖度が高い。冷蔵により2~3ヶ月間品質保持。	三重県 岡山県他	49	96
オーロラブラック	平成15年2月	熟期は9月上中旬、黒色系大粒系ぶどう。食味良好。	岡山県	-	-
ナガノパープル	平成16年6月	熟期は9月上旬、食味が優れ、種がなく皮ごと食べられる。	長野県	-	-

○ 品種構成の動向



(6) 日本なし

① 単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあるため、生産量は減少傾向で、天候不順の年を除けば22年度目標をわずかに下回って推移している。

なお、15年産は、低温日照不足によりみつ症等が発生し、著しく生産量が減少した。

② 赤なしの「幸水」、「豊水」については、シェアを増加させており、また、晩生種の新高も大きく増加している。青なしの「二十世紀」については、栽培面積が大幅に減少している。

③ 近年、青なしについては、「二十世紀」から黒斑病抵抗性を持つ「ゴールド二十世紀」や黒斑病抵抗性を持ち、自家和合性（人工受粉不要）を持つ「おさゴールド」へ転換されている。

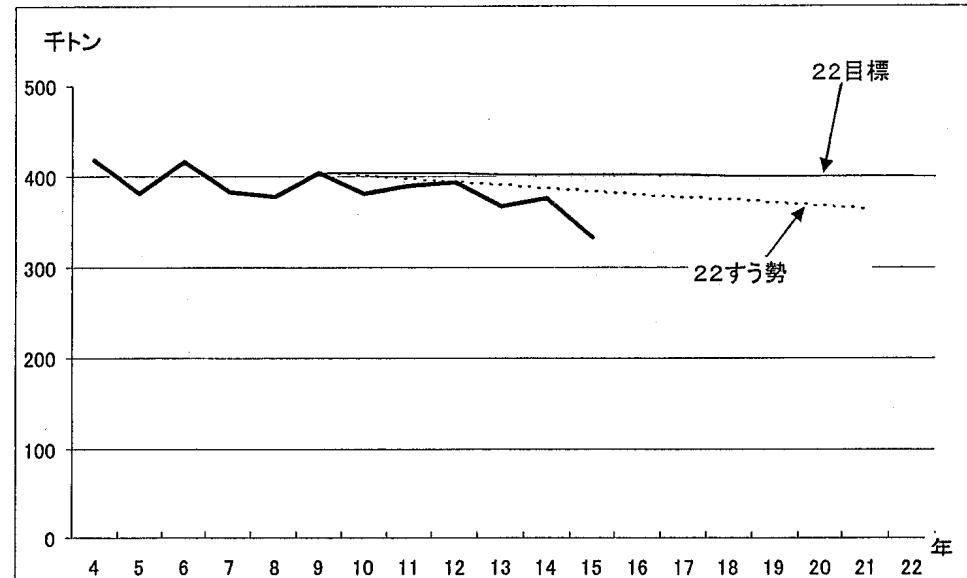
一方、赤なしについては、長野県で晩生種で食味が良く、日持ちの良い「南水」、栃木県では「にっこり」への品種転換が進められている。

④ さらに、早生種の中で、最も糖度が高く、果実肥大も良好な極早生の「あけみづ」が開発されるなど、主産県において、新品種の開発が進められている。

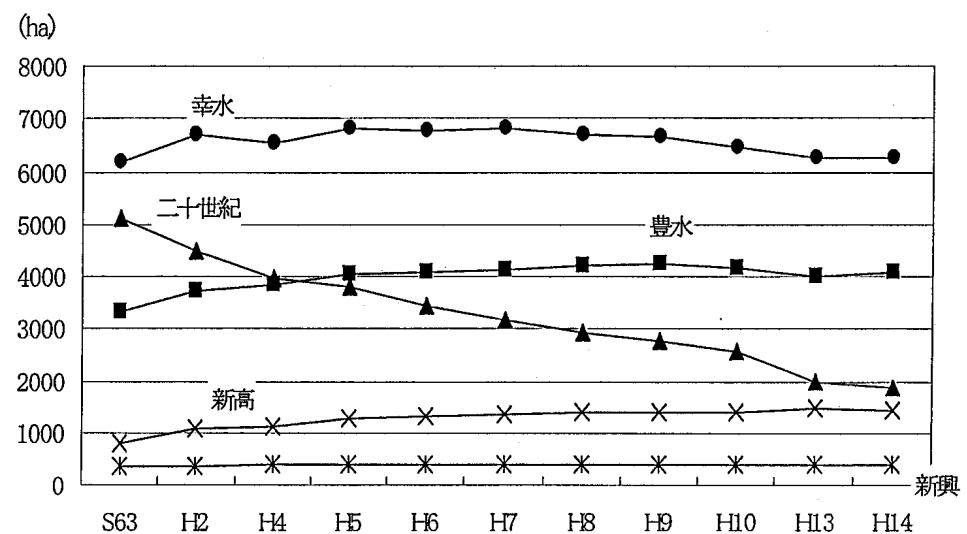
○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
「ゴールド二十世紀」	平成3年12月	熟期は9月上旬の青なし、甘味・酸味は中、黒斑病抵抗性。	鳥取県 島根県他	247	363
南水	平成2年6月	熟期は9月下旬の赤なしの晩生種。食味が優れ日持性が良好。	長野県 他	51	187
にっこり	平成7年8月	熟期は10月下旬の赤なしの晩生種で大果。糖度が高い。黒斑病抵抗性。	栃木県	-	45
王秋	平成15年3月	熟期は10月下旬～11月上旬の赤なしの晩生種、果実は極大。甘味は高、酸味は強。	鳥取県	-	-

○ 日本なしの国内生産量の推移



○ 品種構成の動向



(7) 西洋なし

- ① 栽培面積は堅調な需要に支えられ増加傾向にあり、4年産から15年産で大きく増加している。また、2年産から7年産を中心とし新植、改植が進められ、樹体の生長に伴い単収は増加傾向にある。生産量は大幅な増加傾向で22年度目標を上回って推移している。
- ② 主力品種の「ラ・フランス」については、山形県において、2年頃から新植が進められ、順調にその栽培面積を拡大し、15年産で全国の栽培面積の6割を占めている。
また、かつての主力品種であった「バートレット」は、山形県、岩手県ではほぼ同水準で維持されているものの、北海道、青森県で減少を続け、全国的には減少傾向が続いている。
- ③ 新たな品種として、「ラ・フランス」と「バートレット」の交配により育成した早生種である「越さやか」等の高品質品種が開発されている。

○ 主産県における生産状況（15年産）

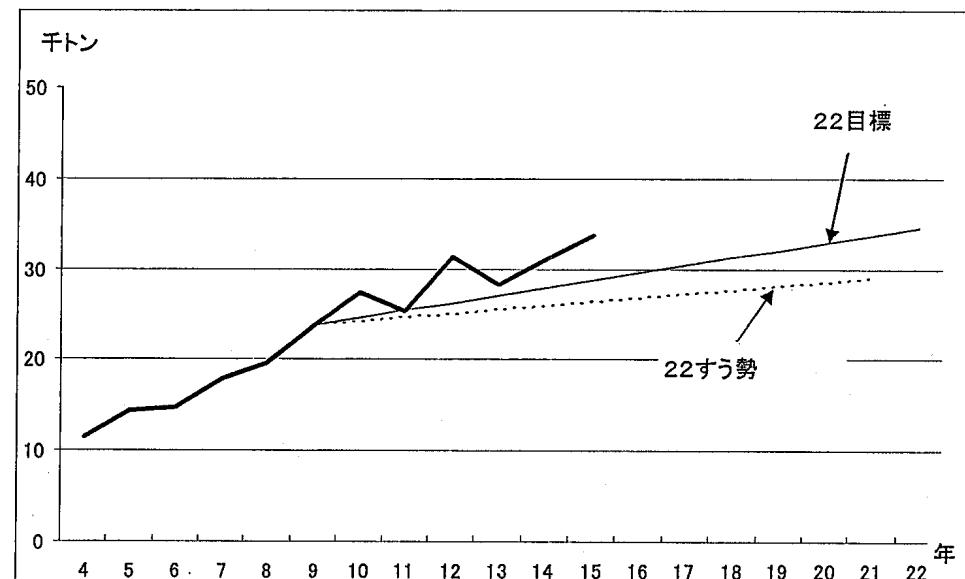
県名	栽培面積(ha)	主要品種
山形県	1,120 (58%)	ラ・フランス
青森県	169 (9%)	ゼネラル・レクラーク、ラ・フランス
長野県	154 (9%)	ラ・フランス
全 国	1,940	

資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「特産果樹生産動態等調査」

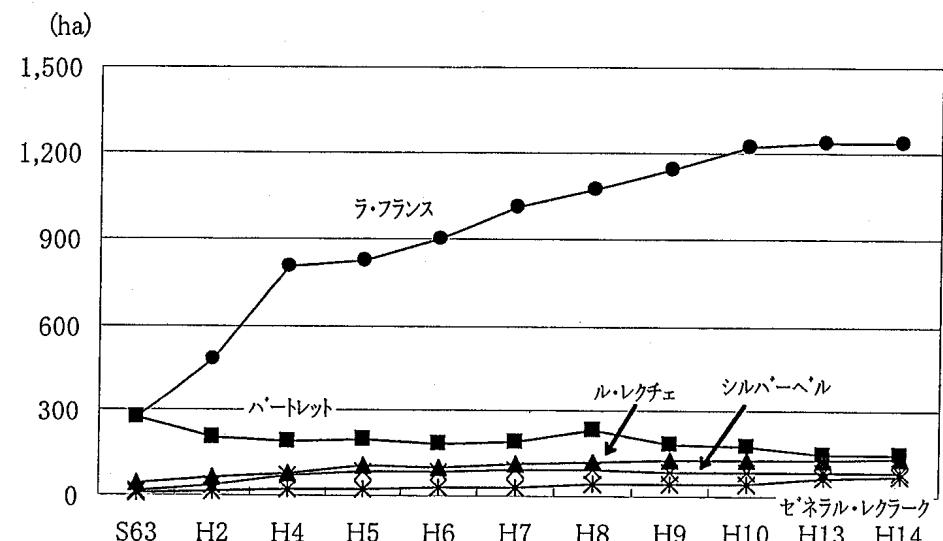
○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
オーロラ	-	熟期は9月上旬で、大きさは大(300~400g程度)、甘味は14~15%と高く、日持ち性良。	山形県	1	51
バラード	平成11年9月	熟期は9月下旬で、大きさは極大(450g程度)、甘味は高、酸味及び香気は中、日持ち性はやや長。	山形県	-	14
越さやか	平成10年10月	熟期は9月下旬で、大きさは280g程度、甘味は14~15%程度。また、収穫時の果皮色は黄緑色だが、追熟とともに黄色へ変化するので食べ頃の判断が容易。	新潟県	-	4

○ 西洋なしの国内生産量の推移



○ 品種構成の動向



(8) もも

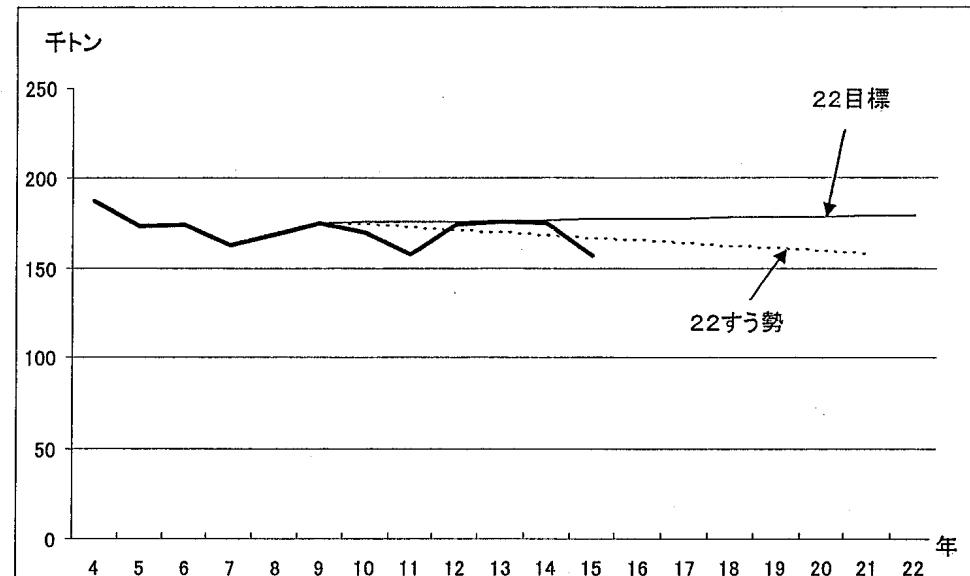
① 栽培面積はわずかに減少傾向にあるものの、単収は増加傾向にあるため、生産量はほぼ横ばいで、天候不順の年を除けば、ほぼ22年度目標どおりに推移している。

なお、11年産においては春の降霜、初夏の大雨により、15年産においては低温日照不足による生理的落果により、著しく生産量が減少した。

② 主力品種であった中生種の「白鳳」が減少し、代わって早生種の「日川白鳳」、中生種の「あかつき」、中晩生では、「川中島白桃」が増加し、主力品種になっている。

③ また、新たな品種として、「なつっこ」、「暁星」等の高糖系の品種が開発され、生産拡大が図られている。

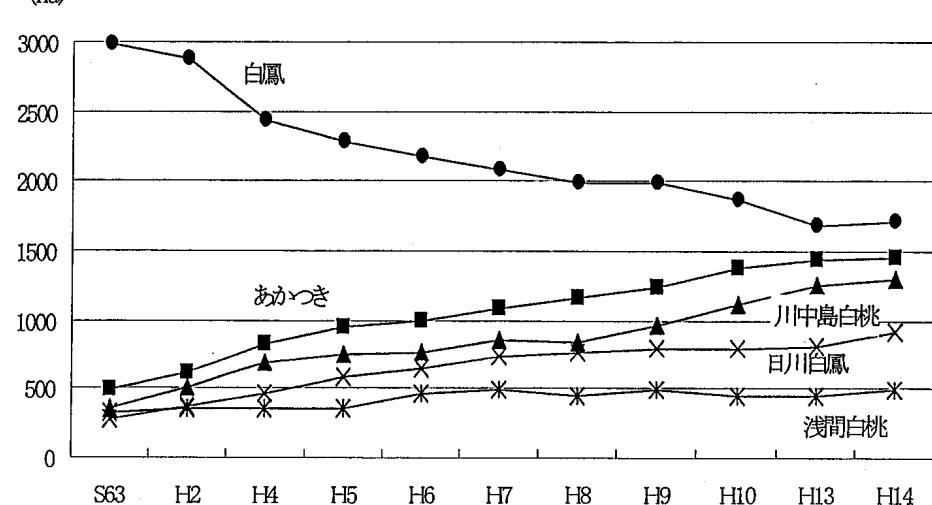
○ ももの国内生産量の推移



○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
暁星	昭和60年11月	熟期は7月下旬の早生種。糖度が高く、食味良で日持性が良。	福島県他	18	95
なつっこ	平成12年12月	熟期は8月中～下旬の中生種。糖度が高く、食味が良。	山梨県 長野県	-	27
なつき	平成11年8月	熟期は7月下旬の早生種。着色良好で、食味が良。	長野県	-	13
みさか白鳳	平成元年9月	熟期は7月上旬の早生種。着色良好で、甘味はやや多。	山梨県他	69	143

○ 品種構成の動向



(9) とうとう（さくらんぼ）

- ① 栽培面積は堅調な需要に支えられ増加傾向にあり、平成4年産から15年産で大きく増加している。また、2年産から10年産まで新植、改植が積極的に進められ、樹体の生長に伴い単収は増加傾向にあるため、生産量は増加傾向あるものの、22年度目標をわずかに下回って推移している。

なお、主産県の山形県において、11、12年産は春の降霜、降ひょう、低温等により、15年産は、開花期間中の低温・降雨による受精不良で着花数が少なく、著しく生産量が減少した。

- ② 主産県の山形県は、元年産から「佐藤錦」の新植、「ナポレオン」からの転換が進められ、順調にその栽培面積を拡大し、全国の栽培面積の6割を占めている。

- ③ 新たな品種として、「佐藤錦」をもとに交配した早生種の「紅さやか」、極晩生種の「紅てまり」等の大玉で高糖度の品種が開発され、生産拡大が図られている。

○ 主産県における生産状況（15年産）

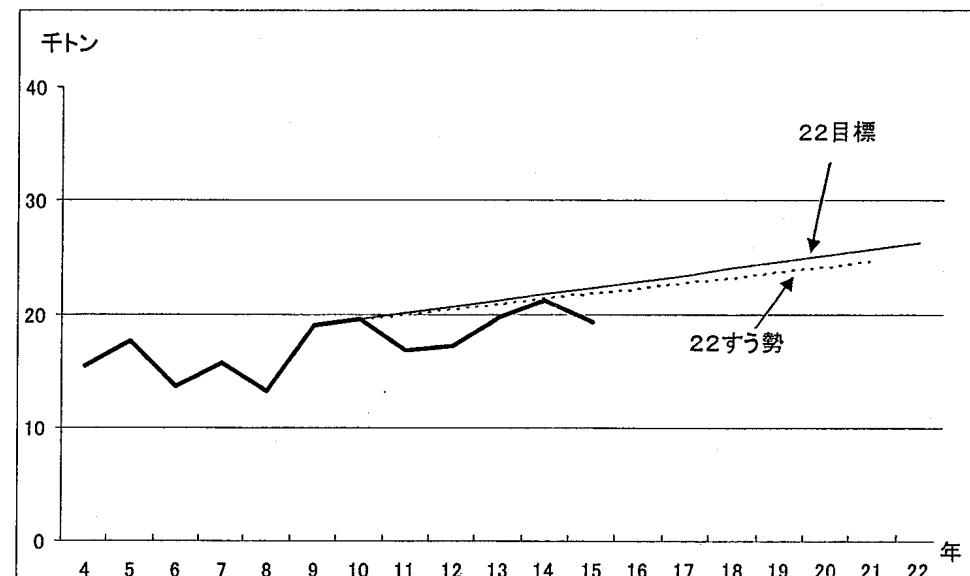
県名	栽培面積(ha)	主要品種
山形県	2,790 (61%)	佐藤錦、ナポレオン、紅秀峰
北海道	637 (14%)	水門、佐藤錦、南陽
青森県	393 (9%)	佐藤錦、水門
全 国	4,600	

資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「特産果樹生産動態等調査」

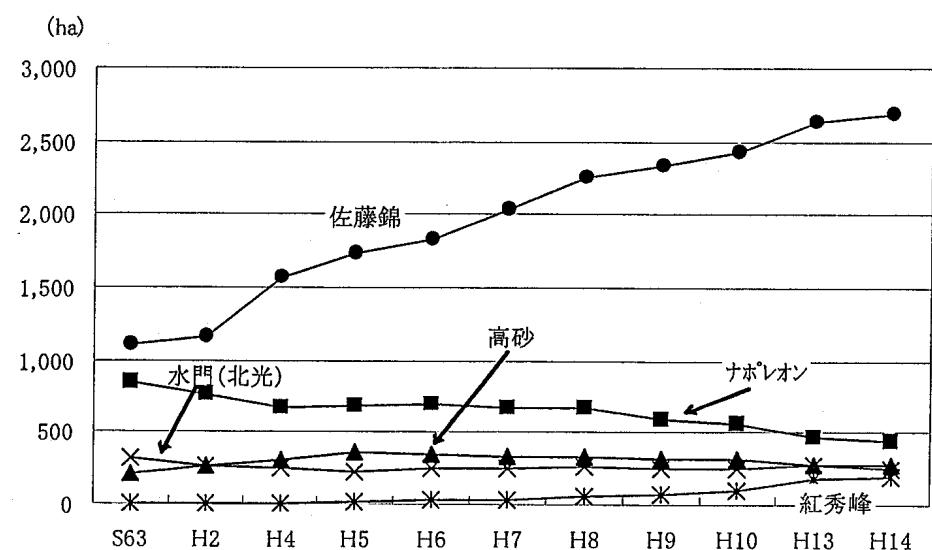
○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
紅さやか	平成3年11月	熟期は6月上旬の早生種、5~7gと早生種としては大玉。糖度は17%前後、果汁多く、食味良好。	山形県	15	43
紅てまり	平成12年12月	熟期は7月上旬の極晩生種、10g以上と極大果。糖度は19%以上と高く、適度な酸味もあり食味は濃厚である。	山形県	-	13

○ とうとう（さくらんぼ）の国内生産量の推移



○ 品種構成の動向



(10) びわ

- ① 単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあるため、生産量は減少傾向で、天候不順の年を除けば22年度目標をわずかに下回って推移している。

なお、12年産は桜島の火山活動により、15年産は長崎県等において、日照不足により果実の肥大が抑制され、著しく生産量が減少した。

- ② 主力品種の「茂木」については、主産県の長崎県、鹿児島県で減少傾向が続いている。また、「長崎早生」については、長崎県でわずかに増加傾向にあるものの、鹿児島県で減少傾向があり、全国的には減少傾向が続いている。

- ③ 新たな品種として、長崎県において「涼風」、「陽玉」、「麗月」等の高品質品種が開発されている。

○ 主産県における生産状況（15年産）

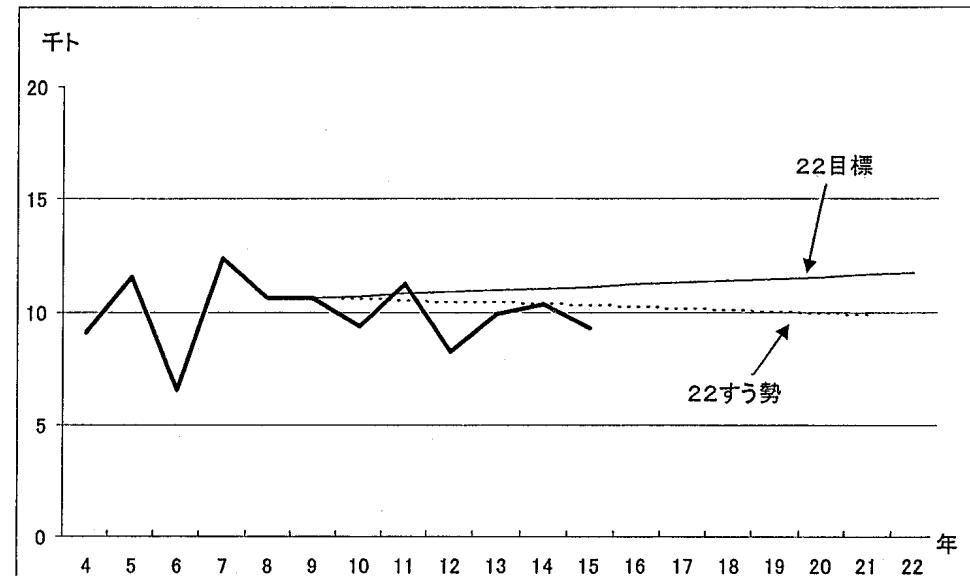
県名	栽培面積(ha)	主要品種
長崎県	661 (32%)	茂木、長崎早生
鹿児島県	313 (15%)	長崎早生、茂木
千葉県	187 (9%)	大房、田中
全 国	2,050	

資料：農林水産省「耕地及び作付け面積統計」、「特産果樹生産動態等調査」

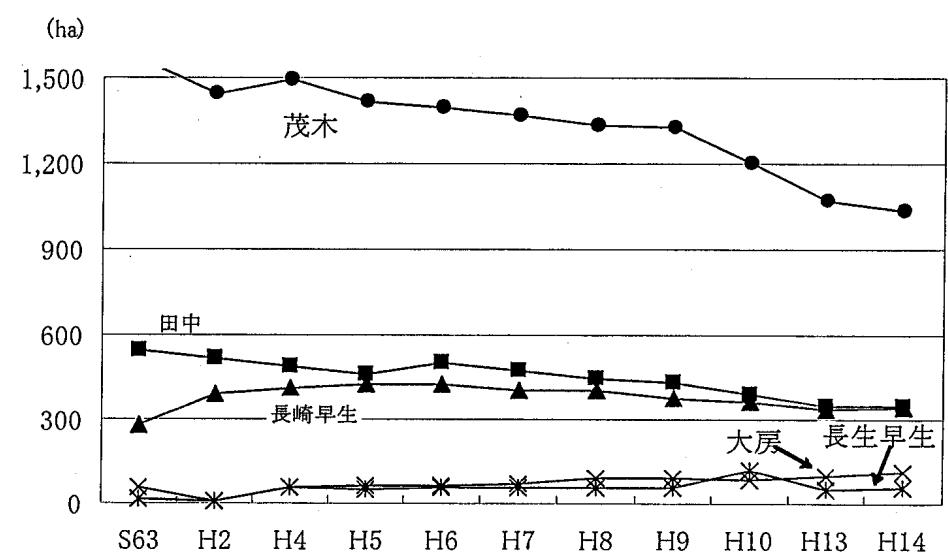
○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
涼風	平成8年8月	熟期は5月下旬～6月上旬、果実重は55g、糖・酸とも高い。	長崎県	-	2
陽玉	平成8年8月	熟期は6月上旬、果実重は60g前後、糖・酸のバランスがよい。	長崎県	-	1
麗月	平成14年9月	熟期は4月下旬、果実重は50g前後、剥皮性良好。糖度は14%前後と高く、食味良好。	長崎県	-	0

○ びわの国内生産量の推移



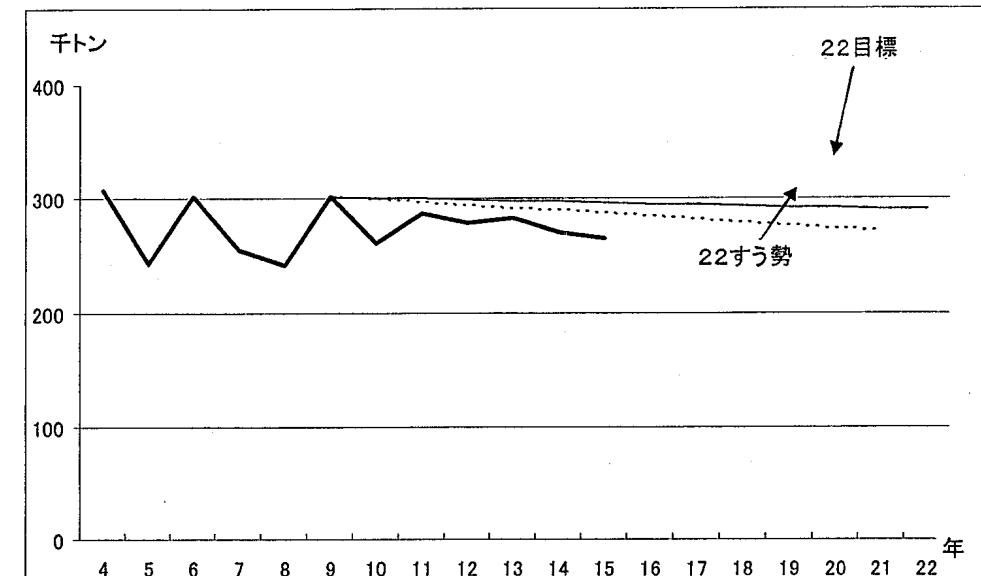
○ 品種構成の動向



(11) かき

- ① 単収は増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向あり、生産量は減少傾向で22年度目標をわずかに下回って推移している。
- ② 甘がきは、主力品種の「富有」が福岡県、岐阜県、奈良県等主産県で減少を続け、甘がき全体として大幅に減少している。一方、渋がきは主力品種の「平核無」が主産県である山形県で減少を続けているものの、「刀根早生」が和歌山県を中心に増加し、渋がき全体としてはほぼ同水準を維持している。
- ③ 新たな品種として、早生種で日持ちの良い「早秋」、極大の「太秋」、「刀根早生」より10日以上早く収穫できる早生種の「中谷早生」等の高品質品種が開発され、生産拡大が図られている。

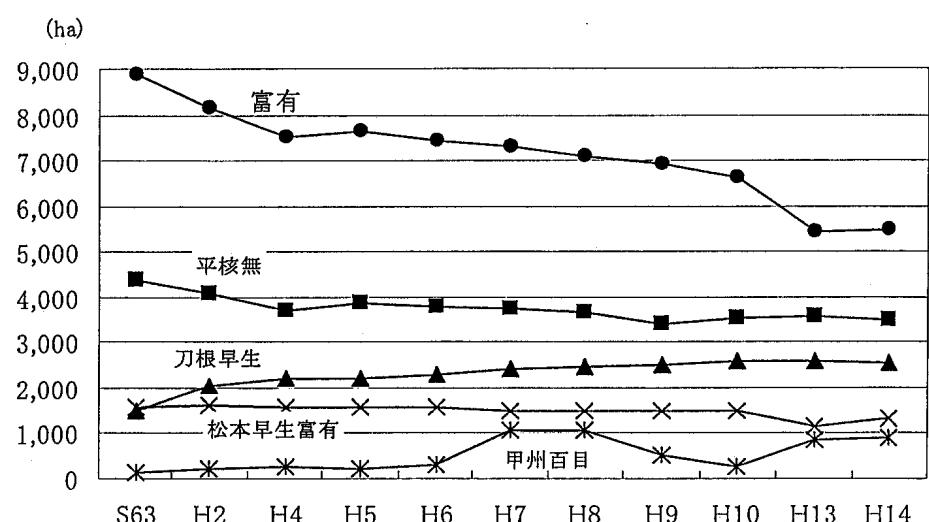
○ かきの国内生産量の推移



○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
早秋	平成12年10月	熟期は10月上旬で、早生の完全甘がき。果実の大きさは中(250g程度)で早生種では日持ちがよい。	福岡県他	-	13
太秋	平成6年8月	熟期は11月上旬の完全甘がき。果実の大きさは極大(400g程度)、甘味は中(糖度17度程度)。	長崎県、愛媛県他	-	79
中谷早生	平成15年8月	熟期は9月中旬の不完全渋がき。	和歌山県	-	14

○ 品種構成の動向



(12) くり

① 単収はほぼ横ばい、栽培面積は減少傾向にあるため、生産量も減少傾向で、22年度目標を下回って推移している。

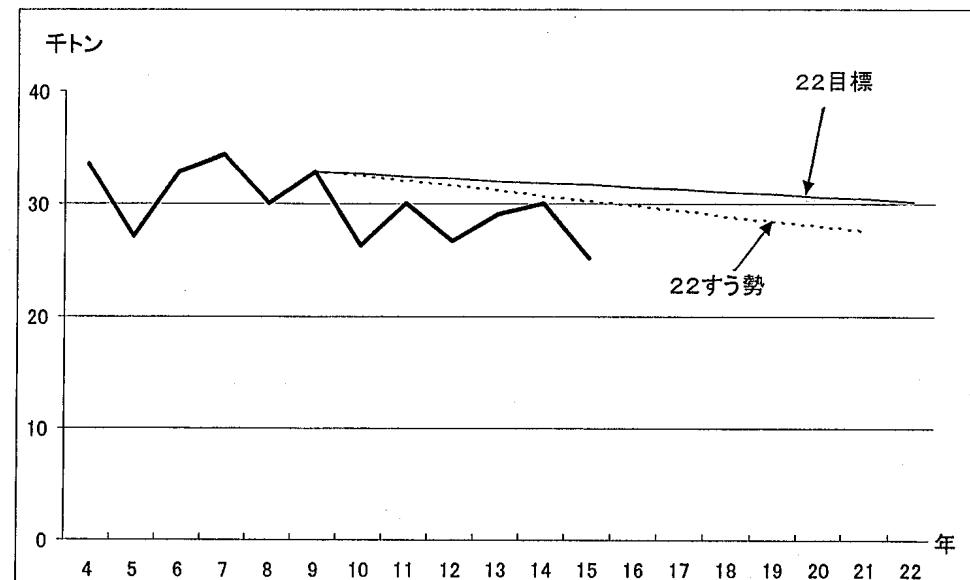
なお、15年産においては、低温日照不足により生理落きゅうが多く、著しく生産量が減少した。

② 新たな品種として、食味の良い早生種である「ソフト西明寺」、「神峰」等の高品質品種が開発され、生産拡大が図られている。

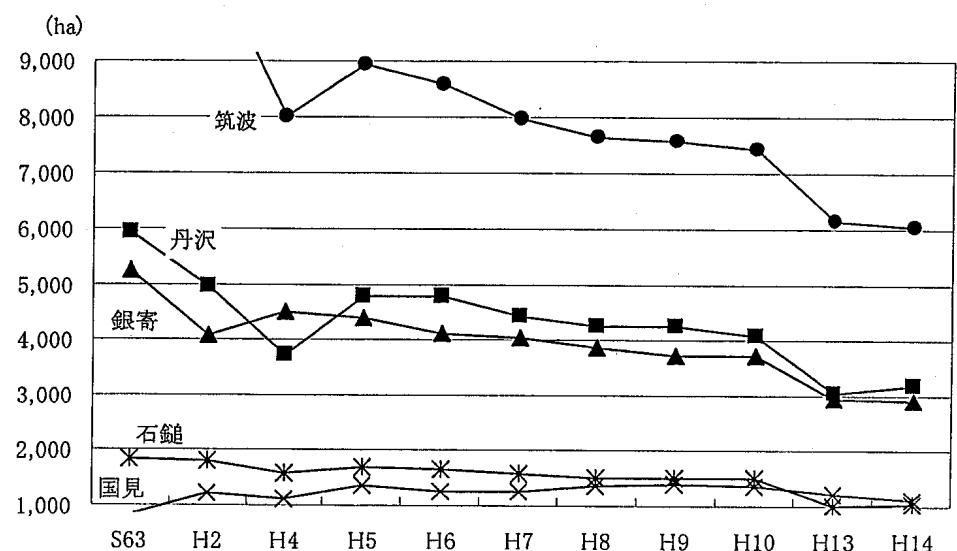
○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県又は導入県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
紫峰	平成6年3月	熟期は9月下旬の中生種。果実の大きさは大、果皮の剥皮の難易は中。クリタマバチ抵抗性は強。	愛媛県	-	56
神峰	平成15年2月	熟期は9月中旬の早生種。果実の大きさはかなり大。甘味はやや多。果皮の剥皮の難易は中。	福岡県	-	4
ソフト西明寺	平成14年3月	熟期は9月下旬～10月上旬の中生種。果実の大きさは大。果皮の剥皮は易。	秋田県	-	0.4

○ くりの国内生産量の推移



○ 品種構成の動向



(13) うめ

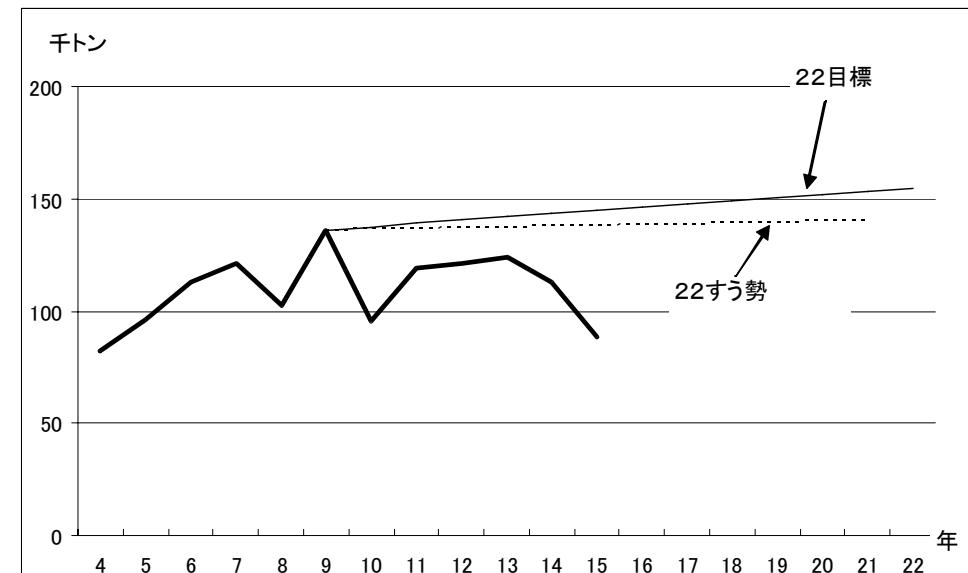
① 単収は増加傾向にあるものの、栽培面積はわずかに減少傾向にあるため、生産量は平成9年産以降は減少傾向で22年度目標を下回って推移している。

なお、15年産においては、生産量の全国シェアが55%である和歌山県において、開花期間中の低温等による受精不良で着花数が少なく、著しく生産量が減少した。

② 和歌山県において、「古城」等から梅干し、加工適性に優れる「南高」への転換が図られ、順調にその栽培面積が拡大している。梅酒加工用に適する「白加賀」は、全国的に栽培が縮小し、減少傾向が続いている。

③ 新たな品種として、豊産性で加工用に適する「新平太夫」等の高品質品種が開発され、生産拡大が図られている。

○ うめの国内生産量の推移



○ 主産県における生産状況（15年産）

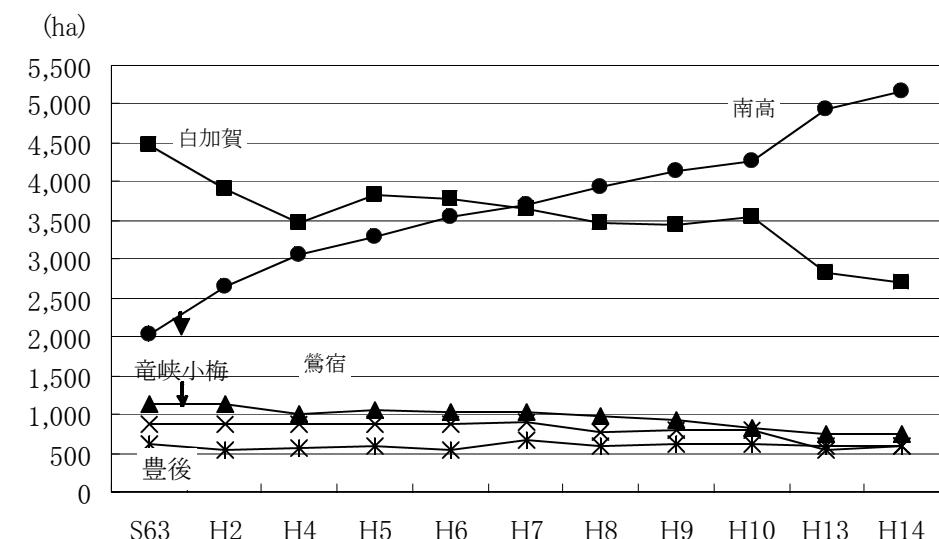
県名	栽培面積(ha)	主要品種
和歌山県	4,840 (26%)	南高、古城、小粒南高
群馬県	1,400 (7%)	白加賀、梅郷、南高
長野県	776 (4%)	竜崎小梅、豊後、白加賀
全 国	18,700	

資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「特産果樹生産動態等調査」

○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県又は導入県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
新平太夫	昭和61年3月	熟期は6月中下旬の中生種で、果実の大きさは20~25g程度。	福井県	-	8

○ 品種構成の動向



(14) すもも

- ① 単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあるため、生産量は減少傾向で、気象災害の年を除いても22年度目標を下回って推移している。

なお、11年産においては春の降霜等により、15年産においては低温・降雨等による受精不良で着花数が少なく、著しく生産量が減少した。

- ② 主力品種の「大石早生すもも」、「ソルダム」、「サンタローザ」については、全国的に栽培が縮小し、減少傾向が続いている。山梨県において、晩生種の「太陽」の栽培面積が拡大している。

- ③ 新たな品種として、「貴陽」、「シンジョウ」等の高糖度品種が開発され、生産拡大が図られている。

○ 主産県における生産状況（15年産）

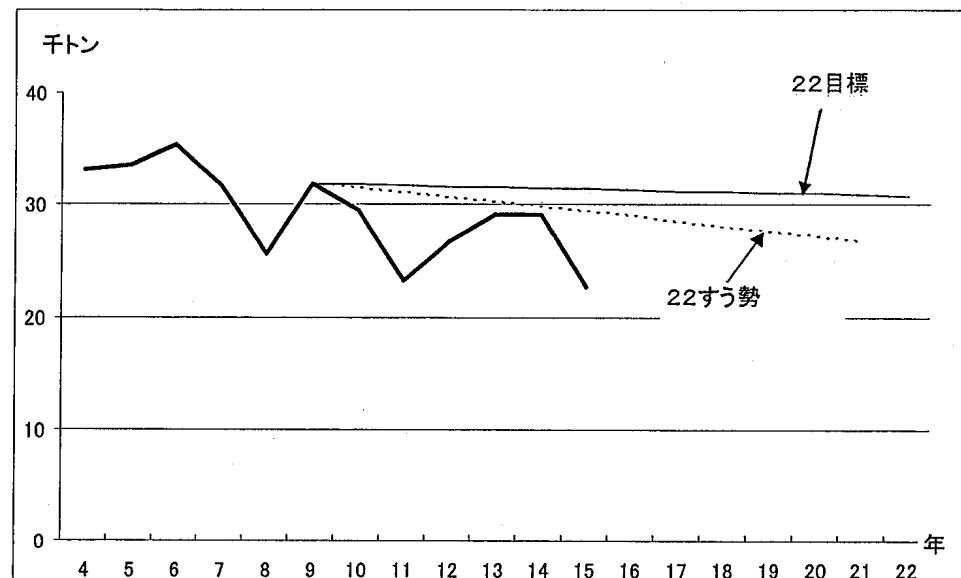
県名	栽培面積(ha)	主要品種
山梨県	1,010 (29%)	ソルダム、大石早生すもも、太陽
長野県	438 (13%)	大石早生すもも、ソルダム、太陽
和歌山県	371 (11%)	大石早生すもも、ソルダム、サンタローザ
全 国	3,450	

資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「特産果樹生産動態等調査」

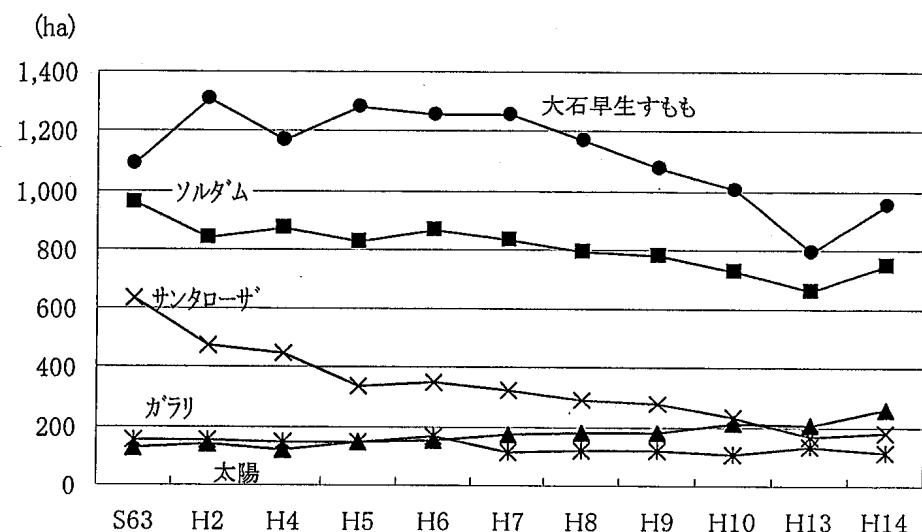
○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県又は導入県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
貴陽	平成8年2月	熟期は7月下旬の中生種。果実の大きさは極大(200g程度)、果汁の多少及び甘味は多。	山梨県 山形県	-	15
シンジョウ	平成14年11月	熟期は6月下旬の中生種。果実の大きさは大、果汁の多少及び甘味は多。	和歌山県	-	0.1

○ すももの国内生産量の推移



○ 品種構成の動向



(15) キウイフルーツ

① 単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は大幅な減少傾向にある。生産量は9年産以降はほぼ横ばいで、22年度目標とほぼ同水準で推移している。

なお、14年産においては台風により、15年産においては低温による果実肥大の抑制等により、生産量が減少した。

② 主力品種の「ヘイワード」については、全国的に栽培が縮小し、減少傾向が続いている。

③ 新たな品種として、「香緑」、「香粹」等の高糖度系の高品質品種が開発され、生産拡大が図られている。

○ 主産県における生産状況（15年産）

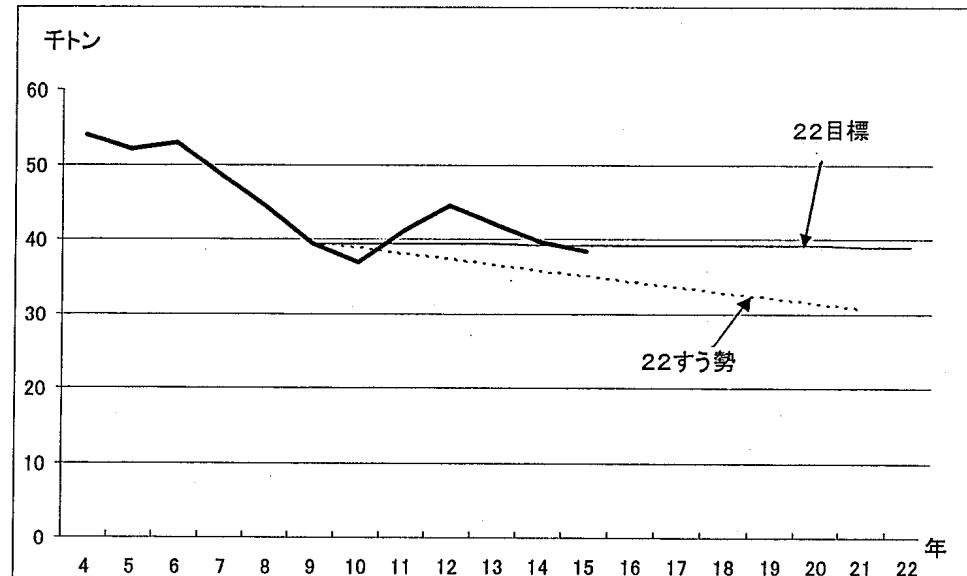
県名	栽培面積(ha)	主要品種
愛媛県	531 (20%)	ヘイワード、トムリ
福岡県	303 (11%)	ヘイワード、トムリ
静岡県	176 (6%)	ヘイワード
全 国	2,720	

資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「特産果樹生産動態等調査」

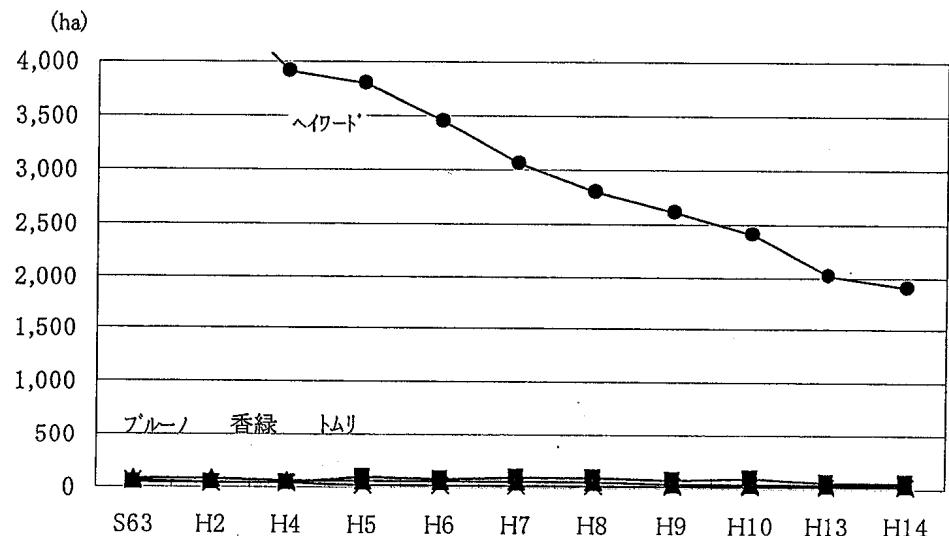
○ 今後生産の増加が期待される品種

品種名	品種登録年	特徴	主産県又は導入県	栽培面積(ha)	
				H7	H14
香緑	昭和62年11月	熟期は10月下旬で、果形は円筒型。果実の大きさは中(100g程度)、糖度は16%程度と高い。	香川県	48	35
香粹	平成11年9月	熟期は10月中下旬で、果形は短楕円形。果実の大きさは45g程度、糖度は高い。	香川県	-	0.5

○ キウイフルーツの国内生産量の推移



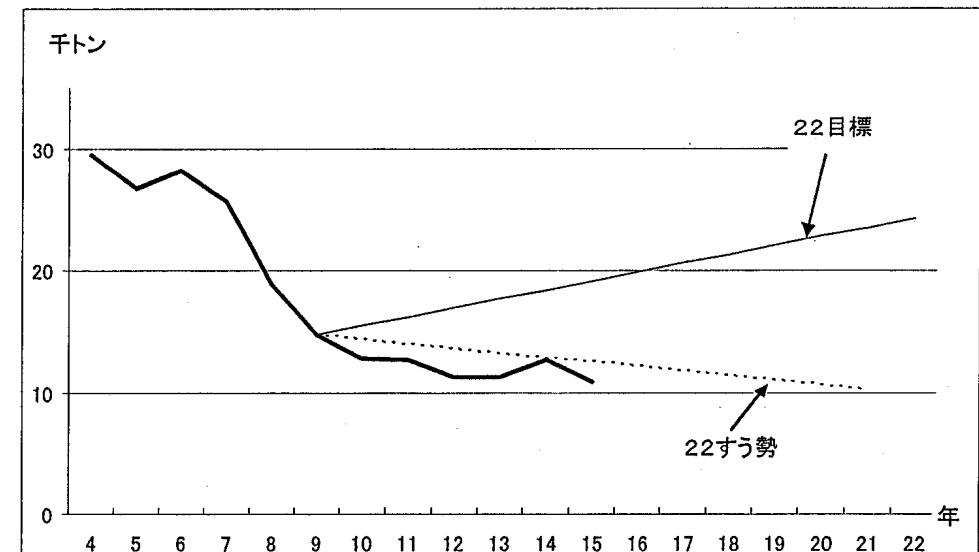
○ 品種構成の動向



(16) パインアップル

① 単収は台風等天候の影響により非常に変動が大きい。栽培面積は大幅な減少傾向にある。生産量は減少傾向で22年度目標を大幅に下回って推移している。

○ パインアップルの国内生産量の推移



○ 主産県における生産状況（15年産）

県名	栽培面積(ha)	主要品種
沖縄県	610 (99%)	N67-10、ボゴール
鹿児島県	4 (1%)	N67-10
全国	614	

資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「特産果樹生産動態等調査」

3 果樹における生産技術対策の今後の方向(第5回産地・経営小委員会資料)

- 競争力のある産地を育成し、国産果実を安定供給するため、産地での合意形成の下、「果樹産地構造改革計画」を策定し、
 - ・高品質化、出荷時期の分散等により、需要に応じた果実を生産するとともに、
 - ・園地集積、基盤整備、労働力調整の一体的な推進を通じた経営規模の拡大や効率的経営の構築が必要である。
- このため、次の取組を推進すべきではないか。
 - ①需要に見合った生産構造へ転換するための品目・品種への転換。高品質果実を生産するための品種導入。
 - ②機械化や省力化技術を導入するための基盤整備の推進。
 - ③環境保全型農業技術の推進。

